
scent

香月 圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

scent

【Nコード】

N7059A

【作者名】

香月 圭

【あらすじ】

不純な動機の図書館通いで始まった高校生の運命の出会い。地下に眠る重いドアの向こうに一体何があるのか。彼女自身の全てを変えた出来事とは？

起

やわらかな春の風が香りを運んできた。私は知っている。この香りを。

― 5年前 ―

「やっぱー。なにこれ。赤が4つもあるやん。おかーはん怒るやろなあ」

年末に配られる例のブツが私の気分を重くした。

「香織は期間中遊び歩いてたやん。自業自得や。ほれ、見てみ。」目の前にだされた彼女のブツには赤いインクは使われてなかった。

「そない遊んでないけどなあ・・・」

それは半分嘘で半分ホントだった。

不覚にもたまには真面目にテスト勉強でもしようと思つた図書館に行ったことが始まりだった。

知的そうな顔に、ノンフレームのメガネ。髪はさらさらで、身長は高く、細め。

そこにいるだけで独特の雰囲気を持ち、あたりの空気をなごやかにしていた。

落としそうになった教科書を持ちなおしてもうすこし周囲を見ると同じようなことを考えているであろう女がいっぱいいた。

それから毎日図書館に通うようになったが、そのくそ女達と静かに争っていたので、もちろん勉強は身に入らなかった。

「あんだねえ、何様のつもり？」

赤点を取ったので少し悩んだけど、ついつい今日も図書館に来てしまった。でも今日は入ろうとしたら、何人かの女に呼び止められ、

今はその図書館の裏で囲まれている。

(こんなのは学校だけと違うんやなあ)

私は半ばあきれながら彼女たちの顔を見渡してみると、何人か知ってる顔があった。

「うわあ。お姉さん二重人格やねえ。いつもと全然違うやん」

彼女たちの顔があきらかに不機嫌そうになった。顔をますます鬼の形相にしていった。

「うるっさいのよ。あんたうざいのよ。佐々木君に悪いと思わないのっつ！!?」

私は不謹慎にも「らっきー」と思った。それが顔に出たんだろうな。さつきから怒鳴りちらしてた人がとうとう右手をあげた。

・・・音はしなかった。でもそれよりすごいもんを見たなあと思っ

た。
「・・・みゆき、いいかげんにしなよ。そんなことばっかしてるから佐々木君にうざがられるんだってば」

みゆきと呼ばれた彼女の右手を止めた人がいた。彼女は知っている。

彼が唯一本当の笑顔で話しているのを見た事があった。やきもちを焼かないといえは嘘だけど、でも彼女なら許してもいいなと思えた人だった。なぜなら彼が本当に笑顔だったから。

彼は誰と話しをしていても、嘘の笑顔だった。必死で笑顔を作ってごまかしている。話している相手は気づいてないだろうけど、ずっと見ていればわかる。あれは嘘の笑顔だ。

なぜそんな笑顔をするんだろうと思った。だから、彼のことが余計気になっていつも見ていた。

「佐々木君がそう言ったわけじゃないでしょ。あんたこそ偉そうなのよ。あきっつ」

みゆきさんはあきと呼ばれた彼女にまで手を出そうとしたので、私は思わず声をかけてしまった。

「あの人が言うわけじゃないですか。でも見ていればわかりま

すよ」

みゆきさんは私をやはり鬼の形相で見据えた。でも私もなれっこだし、だいたいこうなるのは予測もできたので、ひるむ事なく続けた。

「好きで他の事が目に入らないってのもわかりますけどね。彼が何をしに図書館に来ているか考えたらあんなに騒いだら本人が迷惑だつてことくらい小学生でもわかりますよ。みゆきさん」

私はあえて彼女の怒りをあおる言い方をした。彼は本人とは笑顔で話していた。でも図書館ではしゃぐ彼女のまわりの人の目を気にして、彼女が去った後にほっとため息をつくことを私は知っている。彼の名前もしらなかつたけど、少なくともこのみゆきさんには負けれないと思つた。

「みゆきい」

友達二人が彼女の名前を不安気に呼びかける。でも彼女は答えなかつた。

「さち、ゆき、みゆきの家まで送つてつたげてよ」

「うん……。あきも後からきてよね。」

そのあと、ぼそつとあきさんにさちと呼ばれた人が耳元で言ったのが聞こえた。「うちらじゃ何ともできんよ。これ」

三人が行つてしまつて、私はあきさんと二人になつた。

「顔ひつぱたかれそうになつても目をあけてる奴なんて早々いないよねえ。えらい度胸だね。名前は？」

最初に声をかけたのはあきさんのほうだった。私はゆるんでいたマフラ―をなおしながら答えた。

「安城 香織。高校二年。お姉さんこそすごかつたよ」

ふつと笑いながら煙草を口に持つていく。カチンといい音がなり、ゆるい火が年期の入つたジツポーから出ると、彼女は煙草に火をつけた。

「私は、佐藤 亜紀。大学三年よ。祐介くんも、彼女たちも同じ大学で、三年。」

おお。またまたらつきー。彼は佐々木祐介というんだ。そして、私より4つ上になるんだ。

「ふっ。あんた知らなかったんだねえ。名前。おもしろいわ。すぐ顔に出るんだもん」

「まあそれがいいところであり、悪いところでもあるけどね。そのせいですぐに敵作っちゃうもん」

「・・・はー。そのせいか。あんなに度胸よかったの。いいね、香織ちゃんのこと私好きよ」

「私もずっと亜紀さんのこと好きだった」

そのとき、私もしまったなあと思っただけど、亜紀さんも顔がこわばった。

「ありがと。ねえ、どうして祐介くんのこと好きなの？」

「好きなのかなあ。彼が気になるっていうか、観察しているペットのように見てますけど。私」

「はあ？ペット？すごいなあ。なにそれ。高校二年ってそんなに暇だったっけか」

「暇ではないですよ。こないだ赤点とっちゃったし。ただ、気になるの」

「わっかんないなあ。あの子の周りには結構人集まるけど、香織ちゃんみたいなのはいいわ。ね、今度の日曜あいてない？」

「変人扱いですかあ？日曜に人体実験とかしないでくださいよね」
煙草が亜紀さんの指からパーンとはじけ、火種がちらちらと舞い落ちた。

「後悔はさせないわ。ここにおいて。朝10時頃ね」

彼女はメモを渡すと同時に振り返りもせず歩いていった。

「亜紀さん・・・やばそうっすよ」

その言葉が聞こえたのか、また亜紀さんはふっと笑った。

返事はない。少し待ったけど、息を飲んでドアノブに手をかけた。
ぎぎぎぎぎい……

厚い鉄のドアが年期の入った音がした。そして中の空気が入ってきた。それは「佐々木祐介」の香りと少し似ていた。

（香水かなあ）と思いながらも動悸がおさまらなかった。不思議とさっきまでの「不安」はなくなつて、今度はわくわくしていた。

中は広い空間だった。部屋の隅々に段ボールが点在し、床にはなぜか色とりどりのビニールテープが貼られていた。

時計を見たらちょうど10時になったところだった。（おかしいなあ）とあたりを見回してみたけど、人影はなかった。

でも、かすかに人の声が聞こえた気がして、奥へと進んでいった。

「そんな事言われてもわかるわけないでしょ」

「それを理解してほしいんだよ。梨香。」

その時梨香と呼ばれた女の子が持つていた台本らしき物を机に投げつけた。

「言葉にするつて難しいんだよ。頼むよ……」

私は出ていくにも出ていけず、その場に立ちすくんでしまった。手がだんだん冷たくなるのがわかる。どうしよう。このまま知らんぷりして外に出ていくべきなんだろうか。

「もう私駄目だよ。雅司が信じられないんだよ」

雅司と呼ばれた彼はじつと彼女の背中を見ていた。

「はい。そこまで」

背後から大きな声が聞こえた。聞き覚えのある少しハスキーな女の人の声。そう、亜紀さんだった。

「あんたら、そういうのは外でしなさいよ。この子おびえてるじゃない」

台本でぽかぽかと二人の頭をたたいて、振り返り、私を見た。

「こ、こんにちわ」

そう挨拶するのが精一杯だった。今のは何だったんだろう。自慢じゃないけど、生まれてから彼氏なんていたこともない私には刺激が

強すぎた。

「すみません、亜紀さん」

「雅司こないだ頼まれたチケット、手に入ったわよ。梨香と行く為此にここ休んでバイトしてたんでしょ」

亜紀さんが雅司さんにチケットを二枚手渡して、梨香さんに軽くウインクした。その仕草がとても自然で、とてもかっこよかった。梨香さんは目の中の涙をぬぐう事もせず、雅司さんを見ていた。雅司さんは私達の前でさすがに照れたのか、梨香さんの手を取って「失礼します」とだけ亜紀さんに声をかけて外へ出ていった。

「まーったく、手のかかる奴らだよ。って、私も人の事言えないか。ごめんね、香織ちゃん、遅刻しちゃった」

亜紀さんは悪びれず、ちよっと舌を出して笑った。おかげでそれまでこわばってた私の顔がやっとほぐれた。

「佐藤、佐藤、俺おもしろいもん、見ちゃったよ。っと、お客さん？」

声をかけてきたのは、なんと、佐々木祐介さんだった。・・・私は持っていた鞆をゴトンと落としてしまった。

「・・・あれ？」

「彼女、安城香織ちゃん。顔知ってるでしょ。で、おもしろい物って雅司と梨香の事でしょ」

祐介さんがまじまじと私の顔を見たので、私はますます動けなくなっってしまった。

「知ってるも何も。図書館のエリスじゃないか。佐藤がナンパしてきたの？」

祐介さんが私の事を知っていたのには驚いたけど、それよりも「図書館のエリス」という言葉に面食らった。

「あほ。いきなりエリスの名前出したら誰でもびっくりするよ」

「なんだ、いつか僕が声かけようとしてたのに。って何で雅司達の事ってわかるのさ」

ひいひい。祐介さんが私に声をかけるつもりだった？すごすぎる・・・

。声かけてほしかったあと心の中で叫んだ。

「ごめんね、先に声かけちゃって」

亜紀さんは祐介さんと言うより、私を見ながら言った。彼女には心の叫びが聞こえたようだ。

「さっきここで二人もめてるのを香織ちゃんが見ちゃったんだよ」

「・・・それでなんで僕が見たときにはああなってるんだよ」

祐介さんは首をひねりながら「まあいつか」と小さな声で言うと、私のほうを振り返りこう言った。

「ようこそ。劇団カメレオンへ」

転

『もう会えない。私はそれだけの罪を犯してしまった』

舞台上にスポットライトが一つ。彼女は横にいる誰かと話しているようだ。でも暗くて誰かわからない。

『ごめんなさい。私は行かなければいけない。もう二度と会えないでしょう。でも私は忘れない』

横にいる「誰か」は何も語らない。身動き一つせず、ただ彼女の言葉を感じと聞いている。

『・・・ありがとう。さようなら』

そう言った彼女の声はとても寂しそうだった。しばらく「誰か」の言葉を待っていたようだったが、勢いよく走り出してしまった。そして一緒に動き出したスポットライトと共に舞台端で止まる。

『最後まで何も語ってくれないのね。・・・それを待つ私もわがまだけど』

- - 暗転 - -

「そこまで！」

パーンと台本の鳴る音がして明かりがぱあつと広がった。

あれから3ヶ月。私、安藤香織は「劇団カメレオン」の劇団員となっていた。

しかもいきなりの主役。図書館で気になっていた彼は、なんと「図書館でみつけた不思議な目をする彼女」つまり私をイメージして、台本まで作っていた。

驚いたのはそれだけではなかった。しかもこの台本の人物は私の本質そのものだった。彼、佐々木祐介の目はとても鋭く、静かな目で全てを感じ、全てを語った。

私のイメージは「女神エリス」「ギリシャ神話に出てくる、「争いの女神」らしい。

私を「ナンパ」した佐藤亜紀さんも、図書館で私を見ていたみたいだけど、私の参加には反対していたメンバーの一人だったらしい。それがあの「現場」に遭遇し、私を見て、佐々木祐介の眼力を認め、他の反対メンバーを説得したのだという。

そこまでされる魅力のようなものが私の一体どこにあったのだろうかと思っただけど、その話しを断ろうとは思わなかった。

なぜなら私はこの地下二階の雰囲気やにおいがとても心地よかった。練習だというのに、ピンと張りつめた状態のみんなの姿勢がとても惹かれた。

劇団に入るということに両親に反対されるかと思っただら母がとても喜んだ。

少ししぶった顔をした父も、なぜか劇団の名前を言うと許可した。理由を聞いても教えてはくれなかったが、その後の両親はなにか態度がおかしかったような気がした。

「佐々木君、そろそろ香織ちゃん時間よ」

時間を気にせず夢中になって皆と舞台について語る祐介さんに時間を教えるのはいつも亜紀さんだった。

「ああ、もうそんな時間か。じゃ皆とりあえずミーティング。集まって」

ここに入る時の両親の条件は一つだけ。

「門限は9時半」

勉強しろだのなんだの言われるかと思っただら、勉強のことは何一つ言わず、ただ門限のみの条件に少し面食らった。

高校二年、しかも一学期の成績は赤点4つ。大学進学を一応希望している。

しかしそれが私や劇団員、特に祐介さんと亜紀さんのプレッシャーとなったのか、門限にはきっちり帰してくれた。それと共に、勉強の時間もすっかり作られ、教えられる事もあった。

私が帰った後も皆の練習は続く。次の日には演技が全く違う事もひ

どい時には台詞すら変わっている時もあった。

内心あせった時もあつたが、亜紀さんの教えて私はマイペースでいることにしている。

「それでは、お先に失礼します。お疲れさまです」

そう言つて私は祐介さんと共にあのにおいのおいのする地下二階を後にした。

「だんだん香織ちゃんが役にはまってきたのがわかるよ」

「そうですね？・・・でもなんだかまだ違うような気がするんです」

夜9時の街は見慣れた昼とは違う顔をしている。街頭がそつと足下を照らし、なま暖かい風が頬をなでる。

今日はやけに足音が響いた。

「・・・なまいきですか？」

何も語らない祐介さんに少し心配になつて聞いてしまった。でも何か違うような気がする。何かはわからないのだけど。

「いや、嬉しくて。少し驚いたな。普通初めての役でそこまで掴める人っていないから」

「え？」

街頭の光が遮断されて祐介さんの表情が見えない。

「脚本を作つた者としてはこんなに嬉しい事はないよ。香織ちゃんに参加してくれて本当によかつた」

どうしてこの人はそんな事をさらりと語るんだろう。私のほうが恥ずかしくなつてうつむいてしまった。

そのまましばらく二人とも何も語らず、歩いていた。私の家は歩いて10分ほどの所だった。家が見えてしまつと、いつもなんだか寂しかった。でも今日もまた家が見えてきた。

「家、見えてきちゃつたなあ」

ぼそつとつぶやいたただけなのだけど、これだけ静かな道なのだから祐介さんに聞こえないはずがなかつた。

でも彼の反応はなかった。言わなきゃよかったと少し後悔しながら祐介さんの顔を見た。

「祐介さん!？」

街頭に照らされた彼の顔はとても白く、目もうつろになっていた。今にも倒れそうだ。

「だいじょ…うぶ…」

そう言って彼はひざをくずして倒れていった。

結

「ごめんね」

はらはらして待っていた先ほどの電話の相手の肩をたたいて声をかけた。

「せんぱい」

少し涙目になりながら彼女は抱きついてきた。よっぽどはらはらさせたらしくて、彼女には悪いけど、それが少しおかしかった。

「今日は雅司先輩と梨香先輩の結婚式なんですからね！先輩司会もするくせに遅いですよお。私が代役しろとか先輩達言うし〜！！」あれから5年がすぎ、私は今少し大きな舞台に立ちはじめていた。芝居は自分にとってなくてはならないものとなっていた。「劇団カメレオン」も脚本家で舞台監督までしていた佐々木祐介を亡くし、しばらくは再起不能になっていた。その状態が続き、一年になろうかとしたとき、両親に昔話を聞かされた。

佐々木祐介の母と私の父は昔結婚の約束をしていた。

そして、なんと「劇団カメレオン」の創設者は父だった。

父は学生の頃から芝居づけの毎日で、一人息子で病院の跡継ぎだった父を無理矢理見合いさせたのは私の祖母だった。

結局は破談となったが、その原因は父と母の大恋愛が元であった。

祐介さんのおかあさんも他に好きな人がいたらしかったが、相手を両親に言う事ができずにいたらしい。

もちろんその相手は今の旦那さまである。

父と祐介さんのおかあさんはその後も親友同然のつきあいをしていったが、二人の両親は互いの存在を未だによくは思っていないので、私を祐介さんと会わせる事ができなかつたらしい。

そして、祐介さんのおかあさんから母に相談をもちかけられた。

「祐介の命はもってあと半年」

本人もそのことを知っていたが、病院で死ぬのを待つよりも、劇団で芝居がしたいと言った。

その後私は祐介さんのご両親と会い、承諾をもらって劇団員に全て話した。

意外にも亜紀さんは知っていたらしかった。亜紀さんは祐介さんの幼なじみなのだが、病気に苦しむ祐介を皆に悟らせないように協力していたらしい。きつと辛い日々だったのだろう。彼女の落とす影の原因が少しわかったような気がした。

その後、一年遅れとなりながらも舞台にこぎつけ、その舞台が評価され、私も舞台を紹介された。

「劇団カメレオン」を脱退するのはとても迷ったのだが、背中を押してくれたのは父だった。

「香織ちゃん！よかった。間に合ったんだね」

白いウエディングドレスに着替えた花嫁を覗きに行くと、花嫁が少しほっとしたようにほほえんだ。

「さつきは新郎に残念がられちゃいましたけどね。美弥ちゃんがおろおろしてるのがよっぱど楽しかったらしくて」

緊張ぎみだった梨香さんはこわばった頬を少しやわらげ、「全く、雅司は美弥ちゃんをおもちゃか何かと間違えてんのよ」と続けた。

「亜紀さんはよっぱり無理だったんですね」

「一応席はまだ用意してあるけど、どうだろう。今NYなのよ。彼女の舞台装置が評判よくてね、忙しいらしいし」

「あの人ならやるとは思ってたけど、よっぱりすごいなあ」

「何言ってるの。香織ちゃんだって今度NYに行くくせに」

「梨香さんだって雅文さんとロスに行くくせに」

二人は顔を見合わせ、大笑いをしてしまった。それを見た美容師さんが花嫁を注意し、また二人は顔を見合わせた。

あの地下二階は今ももうない。

「劇団カメレオン」も今では少し名が売れて、劇団員もほとんどメンバーは替わってしまった。

今でも目を閉じると思い出す。部屋は熱気に包まれ、かすかな何かの香りがした。

どんなときでも芝居の話しをして、気が付くと朝日が射し込んできて皆であわてた事もあった。

皆真剣だからこそ、いろんな喧嘩もした。

でもそれは全て思い出。

五年前の深い思い出。

でもそれが今の私を支えている。きっとメンバーのほとんどを支えている。

あのときドキドキしたのを今でも覚えている。

亜紀さんに誘われた時。初めてあの地下二階の扉の前に立った時。

そして、「佐々木祐介」を図書館で初めて見かけた時。

きっとあれは恋ではなかった。何かが始まる予感がしたんだと今でも思う。

きっとあの図書館の逢いは神様のおかげ。

そして、運命をたぐりよせたのは祐介さんと私の力。

無事司会を終え、二次会だと皆が騒ぎ立てた頃、亜紀さんはやってきた。

「これ、二人に結婚祝い」

小さな封筒を手渡し、「頑張んなね」とだけ声をかけるとまた忙しそうにタクシーに乗り込んでいった。

皆があっけにとられていると、タクシーの窓が少し開き、今度は私に声をかけた。

「NYで待つてる」

ふっと笑い、亜紀さんは行ってしまった。

彼女らしい仕草に半ばあきれながらも、少しの不安がなくなった事

が嬉しかった。

皆、いつか旅立つものだ。それは不安と、ドキドキの入り交じった感情で。

勇気を出して一歩先に踏み出そう。

神様の気まぐれだけで幸せはこない。

運命は自分でたぐり寄せるモノ！

結（後書き）

最後まで読んでいただいております。ありがとうございます。

このお話で最終話となります。

ご意見、ご感想等いただけたら幸いです。

香月 圭

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7059a/>

scent

2010年10月17日05時35分発行